

第 57 回
北海道学校体育研究大会札幌大会
報告書



授業日：令和3年10月8日（金）20日（水）

協議日：令和4年1月7日（金）

北海道学校体育研究連盟

第57回北海道学校体育研究大会札幌大会

大会記録

目次

- ◇ 各会場授業・分科会記録
 - ・ 札幌市立伏見小学校
 - ・ 札幌市立資生館小学校
 - ・ 札幌市立厚別中学校
 - ・ 札幌市立美香保中学校

- ◇ 大会を終えて

第57回北海道学校体育研究大会

実行委員長

四戸 基樹

授業・分科会記録

札幌市立伏見小学校

単元 表現運動 表現 「お料理パーティーを開こう！」

授業者 秋元 来舞 教諭 (札幌市立伏見小学校)

児童 3年1組 39名

〈授業の様子〉

○準備活動

挨拶 準備運動 リズムダンス『ジングスカン』 新聞紙 なりきりものカルタ (個々に表現)
本時の活動につながる動きを意識した活動を行った。

○導入の活動

お料理パーティーのメニュー 校長先生から注文を受けるというストーリー『ポップコーン』

○課題を見付ける活動

ポップコーンができる様子を動画で視聴し、膨らんで弾ける様子や音などを個々に捉える場を設定した。本時のメニューが分かった瞬間から、全体交流の場で即興的にポップコーンを表現する子どもの姿が見られた。課題を見付ける活動の段階では、その場で高くジャンプする動きや、手足を広げたり縮めたりして表現する子どもが多かった。全体交流を通してどんな動きをしたらよいか個々に考え、グループ活動に移行していった。



○課題追究・ペアグループ交流

少人数のグループでポップコーンを表現する動きを考えていった。動きのもとになるカードを活用しながら、ポップコーンがだんだん膨らみ、弾けていくまでのひと流れの動きについてグループで交流し、音楽にのってポップコーンを繰り返し表現していく姿が見られた。ペアグループで見合い、よりポップコーンに近づく動きになるためのアドバイスを伝え合った。交流によって自分たちの動きの課題が明らかとなり、最後の発表では、どのグループも動きが大きく変容し、工夫が生きた表現となった。



○まとめ

振り返り 整理運動 後片付け 挨拶

グループで表現し、ペアグループで表現を見合った結果、どのような動きの工夫を見つけたか、全体交流した。どんな工夫をしたらポップコーンの弾ける感じが表せるか、見つけたことをワークシートに書き込み、自分の動きの変容を実感する姿があった。

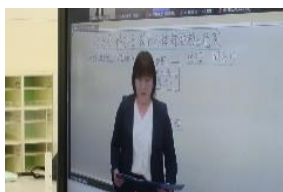
令和3年度 北海道学校体育研究大会 札幌大会 伏見小会場 授業記録

単元： 表現運動 表現 「お料理パーティーを開こう！」
授業者： 秋元 来舞 教諭 (札幌市立伏見小学校)
司会者： 余田 峻也 教諭 (札幌市立幌南小学校)
記録者： 吉野 令欧奈 教諭 (札幌市立二条小学校)
助言者： 中島 寿宏 様 (北海道教育大学札幌校 准教授)

〈分科会の様子〉

○討議の中心話題

- 視点1 主体的・対話的な姿を生む教材化と学習過程
- 視点2 主体的・対話的な姿を生む関わり
- 視点3 深い学びを生む評価



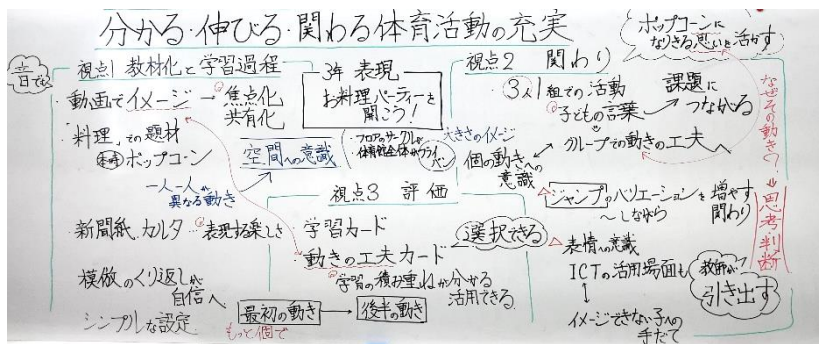
○質問

- ・子どもたちが表現にとっても親しんでいた。
料理パーティーというテーマ設定は子どもにとってよいと感じた。
料理以外でテーマに取り入れようと考えていたものがあれば知りたい。
- ・表現運動の特性という部分をどのように捉えて授業づくりをしたか。
- ・どのような子どもの姿を目指していたか。ポップコーンになりきる姿か、多様な動きを表す姿か。
- ・技能面の評価で どんな動きをしたか教師側が覚えていないことがあるので、子どもの様子を録画するなど記録の工夫があれば知りたい。

○討議で見えた課題

- ・一つにまとめたものを表現してきた単元の中で、本時が初めて個々にバラバラの動きを要する課題となる。実際の活動は、動きが小規模であったように見受けられた。空間を大きく使って動き出せるような手立てがあるとよりよいのではないか。
- ・カードにある動きを選択する手立てに頼りすぎてしまうと、限られた範囲内での動きになってしまう。子どもたちが見つけた動きの工夫を全体共有できるよう、教師が積極的に関わっていた。子どもの動きには「ジャンプ+〇〇する」「手をたたきながら」「表情の工夫」など動きの工夫と、“なぜその動きを取り入れたのか”という子どもの思いも価値付け、全体共有していくことが大切。
- ・子どもたちの中の空間への意識が固定されてしまっているように見受けられた。動きのイメージをもたせるためのカードが活用されていたので、より効果的に活用するためには、カードを組み合わせることでいくことが有効ではないか。“とぶ”というカードに“手を広げる”を組み合わせるのがよいのか、“だんだん大きく”に“とぶ”を組み合わせるのがよいか、グループでの活動を通して選んでいくなどすると深まっていくと考える。

- ・新聞紙での活動はとても有効。毎時間の積み重ねによって本時の主体的な姿が生まれた。表現は難しいので、単元が進むにつれて課題をシンプルにしていけるとよいと思う。



- ・初めて表現するときはずぐに動けないので、たくさん模倣をしてから動きを考えると学習の流れを作っていきたい。中学年の発達段階では、教師がいかに例を示すかが大事になってくる。
- ・ポップコーンというテーマに絞ったとしても、自分がもし授業をしたら広がってしまうのではと想像しながら見ていた。授業で子どもがどの部分を表現するか明確にするために動画を見せるというのは有効であった。
- ・同じポップコーンをテーマにした授業では、子どもたちに料理の音を聞かせ、そこからイメージしたことを表現するように進めた。動画の活用については、例えば先生がタブレットを携帯し、イメージがどうしても分からない子に対して個別に見せるという手立てにはどうか。
- ・子どもたちは、グループ表現を意識した発言はしているものの、活動自体は個々に動きを工夫している姿が多かった。集団で表現したいという思いは子どもたちの中にあっただと思う。「ホットケーキの時と同じようにポップコーンになったときにもいろんな子といろんな動きをしたい。」という思いを、本時での「もっと人数を増やして表現したい。」という子どもの声から生かしていきたい。

〈助言者講評〉

北海道教育大学札幌校 准教授 中島 寿宏 様

- ・子どもたちがよく動いていてよかった。実際に授業を見て秋元先生の成長を感じていた。子どもの状態をしっかり見ながら、どんな関わりが必要なのか考えながら授業を進めることができていた。
- ・単元計画がよく考えられていると感じた。3年生くらいの発達段階では、表現する事象の前後のつながりを理解するのが難しい。今回のような「お料理パーティー」という設定によって子どもを表現に引き込んでいくことは有効であった。子どもたちが楽しみながら動いていく中から、思考・判断・表現を引き出していくことが大切である。
- ・思考・判断したものでないと表現できない。何もないところから表現することはできない。今回のカードの使い方は思考判断を助ける部分では有効だった。今回は、カードを使うことによって、一度言葉に落とし込み、動きの工夫と交換していくことに繋がっていた。
- ・動画は、子どもの実態と目標次第で有効に活用することができる。イメージの固着から脱することができないこともあるが、動画を出すことによって目標に迫ることができる場合もある。動画、静止画、音声のみなど、子どもの実態と授業目標に合わせて、学習の道筋を作るために使っていくことが大切である。

授業・分科会記録

札幌市立資生館小学校

単元：ボール運動ゴール型 「チームでトライ！タグラグビー！」

授業者：渡辺 佳幸 教諭（札幌市立資生館小学校）

児童：5年2組 30名

<授業の様子>

○準備運動

あいさつをし、全体で本時の運動に適した準備運動を行った。



○導入の活動

・ドリルゲーム

ボールを持っていない人の後ろについて行ってパスをもらうフォロワー、走りながらパスの受け渡しをするランニングパスゲーム、後ろからダッシュしてくる人に合わせてパスを出すダッシュパスゲームの3つのゲームを準備した。その中からチームの課題に合ったものを選び、練習を行った。各チーム、どれを選択するか迷うことなくスムーズに活動に入っていた。

・課題把握の交流

前時の授業の様子の中で、止まってパスを受けている人の動画を見ることで課題を生んだ。味方の動きに合わせてフォローしている、すぐにパスを出しているけどタグを取られてしまうという状況が困りとなった。そこで「タグを取られたときにボールを持たない人はどう動くよいか。」という学習課題の把握を行った。上手くトライできているチームの動画を見ることで、「動いてパスをもらっている。」「前に動いている。」など解決の糸口を見出していた。さらにその動画を上から見たアニメーションにしたものを見た。子どもたちはより動きのイメージがわいたようで、「前に動きながらパスをもらおうとタグをとられずにトライできそうだ。」という思いを強くもつことができた。



○解決に迫る活動

・動きの確認

ゆっくりとした動きの中で、前に動きながらパスを受ける動きを確認した。

・タスクゲーム

3対2で課題を解決するための動きを確かめた。「ナイスプレー」と声をかけることで動きの質が高まっていた。また、授業者と一緒に動いたり動き方や場所を伝えたりすることでも「できそうだ。」という児童の意欲や自信が高まっていった。

・メインゲーム

単元を通して行っている3対3で、動きの高まりを実感した。タグを取られたタイミングに合わせて前に動いてもらったり、一人飛ばしてパスをしたりとトライに向かう姿がたくさん見られた。トライすることができなくても、授業やチームの仲間がたくさん声かけをしていたことで温かな雰囲気の中でメインゲームを行うことができた。



○まとめ

振り返りでは「前に動きながらパスをもらう」ことについて、チームの仲間と学習場面を想起しながらお互いによかったところや上手くいったところなどを伝え合って動きの高まりを確かめた。

単元：ボール運動ゴール型「チームでトライ！タグラグビー！」

授業者：渡辺 佳幸 教諭（札幌市立資生館小学校）

司会者：上木 一也 教諭（札幌市立清田南小学校）

記録者：田牧 亜紀 教諭（札幌市立二十四軒小学校）

助言者：岩田 悟 様（札幌市教育委員会指導主事）



<分科会の様子>

○討議の中心話題

視点1 主体的・対話的な姿を生む教材化と学習課程

視点2 主体的・対話的な姿を生む関わり

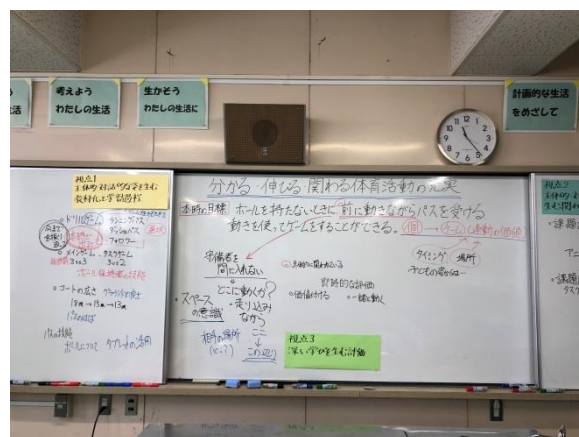
視点3 深い学びを生む評価

○質問

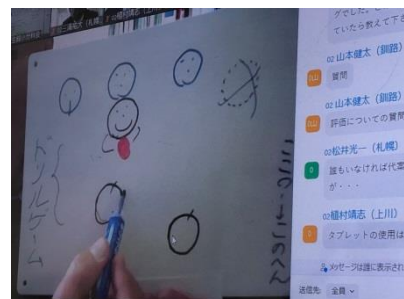
- ・コートの上さについて
- ・位置取りとパスの方法
- ・単元構造図にあるのはボールを持っている子のことなのか、それともボールを持っていない子のことなのか
- ・タスクゲームが3対2でメインゲームが3対3である意図
- ・A基準の評価について
- ・単元計画では4時間目までタイミングについて書かれていたので、本時はボール保持者の技能になっていたのでは
- ・ボールの選定について

○討議で見えた課題

- ・先生の温かな関わりがとてもよかった。パスのタイミングが上手くいかないチームに関わることでできるようになっていたり、上手く動くことができない子と一緒に動いて成功体験を積み重ねていたり素晴らしかった。子どもの自信につながるような関わりもよかった。
- ・チームに重きを置いての単元計画や、グラウンドでの実施がよかった。みんなでつないでトライする、という意識が高かった。
- ・山なりのパスになってしまったりタイミングがずれてしまったりしていたので、パスの技能がもっと高まるとよかった。一人飛ばしてパスなどを使ってもよかったのでは。
- ・前に動きながらパスをもらうという意識が非常に高かった。
- ・前に動きながらもらうことは大事だが、相手がいなくてやボールをとられないところなどスペースの意識も必要だったのでは。本時まで空いているスペースをどこまで意識できたかによっても変わってくる。スペースを意識することで遠くまでパスできるようになるなどレベルアップした動きが見られたかもしれない。
- ・ボールをもらう子がどこにスペースがあるのか理解できている子は少なかったのでは。
- ・ボール、味方、相手、スペースなど見ることがたくさんありすぎた。相手の位置をどう見るのかが大事なので「どこで」というスペースに関しての内容があるとよかった。

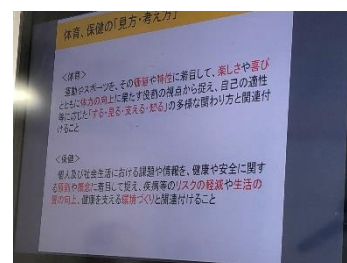


- ・課題解決の場面では、動画が答えそのものになってしまっていたので子どもが考える場面が見られなかった。
- ・前に動いてもらうことが目的化していた。動きながらもらってほしいという教師の意図があったと思うが、「パスを受ける時にどんな受け方があるんだろうね。」というようなことを考えていってもよかったのかもしれない。
- ・メインゲームの中で、ドリルゲームの動きが出てくるとよかった。ドリルゲームを想起しながら課題解決をしていくこともできた。
- ・一人一台端末があるので、今回の授業でも活用できたかもしれない。



<助言者講評>

- ・コロナ禍の中、授業を組んでいただいたことに感謝。今の状況であれば、動画コンテンツのニーズもあったのではないと思う。一方で、動画コンテンツが学校の授業にとってかわるものではない。学校だからこそできるもの、価値あるものになっているかどうかを考えながら授業実践をしていくべきである。
- ・今回の研究は、どのように学ぶのかに視点を当てた研究である。教師がどのように学ぶかは、働き方改革があっても手を抜いてはいけない部分である。
- ・主体的・対話的で深い学びとあるが、これは目的ではない。資質能力の育成が目的である。しかし資質能力の育成が図られたらそれでよいわけではなく、どのように学ぶかが授業の肝になってくる。今回の授業のように、目標を明確にしていくことはとても大切である。
- ・ボールゲームは判断しながら個々の技能を発揮するのが楽しい教材である。反面、意識しなければならないことがたくさんあるのが難しい部分でもある。だからこそ簡易化して授業を実践していくことが大事である。
- ・指導と評価の計画や単元構造図は大変分かりやすくよかった。知識技能に重きを置いて公開したのもよかった。先生の子どもへの関わりや雰囲気よかったからこそ素晴らしい授業になった。
- ・課題を生むところは、教師の問いかけに対するものではなく教師の指示のように感じた。課題を書いた紙を準備し、貼り付けるのはあまり好ましくない。子どもにしたら「準備しているのなら最初から出してよ。」となってしまうから。子どもが自ら課題を見つけたように教師が仕組むことが大事である。課題を生むために文脈や理由があったか、そしてそれが間接的であったかを意識していく必要がある。
- ・「コートが狭くなってもトライするためには？」という課題になった時の文脈が途絶えてしまっている。コートが狭くなった時、攻めと守りがどのような状況になった時に上手いかないのかなど具体的な場面を子ども自身が想起できるような関わりが大事である。そうすることで課題に至るまでの文脈が生まれてくる。教師の手立ては間接的でなければいけない。
- ・子どもの資質能力を伸ばしていくことを考えながら評価基準の設定の仕方も吟味していくとよい。



授業・分科会記録

札幌市立厚別中学校

令和3年度北海道学校体育研究大会 札幌大会 厚別中学校会場 授業記録

単 元： 球技ゴール型 ハンドボール 「空間を作り出すオフENSEの構築」

授業者： 高橋 利幸 教諭 (札幌市立厚別中学校)

児 童： 1年5組 28名

〈授業の様子〉

OW-up

- ・ステップワーク、二人組のボールを使ったドリル練習

○課題を見付ける活動

- ・前時までの映像を視聴

ディフェンスがうまくできている場面を取り上げ、ボールを持っていない選手がどう動いたらよいかといった点に課題意識をもたせた。生徒と対話を重ね、学習課題『ボールを持っていない時にどんなことができるだろうか』と設定した。



○解決に迫る活動①

・ボールを持っていない選手がどのように動けばよいか改善策を考え、チームで練習を行った。その後、3対3のゲームで他チームとの交流を行った。生徒からは、交流の中で「ボールをもらうフリをする。」「適度にスペースを広げる。」などの意見が出された。



○解決に迫る活動②

・簡易ゲームを行い、お互いにアドバイスを行った。試合後、自チームにアドバイスを持ち帰り班全体で意見の交流を行った。

○まとめ

・chromebook を使用して、ドキュメントへの振り返りの記入とインタビュー動画の撮影を行った。

令和3年度 北海道学校体育研究大会 札幌大会 厚別中学校会場 分科会記録

単元： 球技ゴール型 ハンドボール 「空間を作り出すオフENSEの構築」

授業者： 高橋 利幸 教諭 (札幌市立厚別中学校)

司会者： 飯嶋 孝行 教諭 (札幌市立向陵中学校)

記録者： 佐々木 亮斗 教諭 (札幌市立北都中学校)

助言者： 田中 貴博 様 (北海道教育庁健康体育課)

〈分科会の様子〉

○討議の中心話題

- ・単元の組立てについて (なぜオールコートではなく、ハーフコートなのか)
- ・生徒の振り返りをどのように共有していくのか。また、どのように生かしていくのか。

○質問

- ・単元を通して、ハーフコートの3対3を中心に進めていたが、その意図とは何か。
- ・ボールを持たない人の動きについて、生徒はどのような課題 (つまずき) を発見していたのか。また、本時の授業後には、生徒はどのような課題解決の姿があったのか。そして、どのように評価に繋がっていくのか。
- ・ゲートスルーのルールはオールコートの攻防でも最後まで徹底されていたのか。
- ・振り返りの場面で、タブレットを使用して動画を撮影していたが、周囲の生徒はその様子を観察していなかった。撮影した動画 (振り返り) は今後どのように生徒にフィードバックされていくのか。

○討議で見た課題

授業者は【C】の評価がしてしまう生徒の底上げを目指し、ハーフコートの3対3を中心に単元の構築を図った。また、3年間を見通した指導という観点においても次年度へのつながりを意識し、戦術面に特化した授業を展開した。しかし、多くの生徒の振り返りに、「もっとオールコートでやりたい」という声があったことも事実である。また、討議の



参加者からは「【C】の生徒の手立ても必要だが、【B】以上の生徒に対してのアプローチも必要ではないか」というご指摘もいただいた。毎授業の中で少しでもオールコートにつながるような動きや手立てがあれば、【C】以外の生徒の意欲も継続することができ、考える習慣を創出する1つのきっかけとなる。本単元の計画では、オールコートでの試合は予定されていなかったが、生徒の技能の高まりを受けて、12時間目でオールコートでの攻防を行った。生徒が考える習慣をつくり出すPDCAサイクルの実践が今後の課題となった。ICTの活用については、タブレットを積極的に活用したが、振り返りで撮影した動画を全体で共有する場面をつくれなかったことや授業と評価の一体化も課題としてあった。

〈助言者講評〉

高橋教諭のハツラツとした雰囲気と生徒との信頼関係が垣間見えた。また、単元を通して「する」「見る」「支える」を織り交ぜながら指導されていた。12時間目の映像を見ると、本時（8時間目）からの大きな変容を遂げた生徒の様子があった。教師の指導が生徒の活発な姿を生んでいた。

◆授業の感想について

(1) 運動が苦手な生徒をどのように主体的・意欲的に取り組ませることができるか

小中の系統的な指導にポイントがある。中学校段階でも技能や知識を確実に定着させていくことが重要であり、本単元では単元を通して、基礎的な技能や知識を身に付けることができていた。

(2) 主運動につながるウォーミングアップ

導入時にサイドステップやボールの壁当てなどの動きを積極的に取り入れていた。「運動量の確保」、「生徒の充実感」、「体力の向上」という点において非常に重要である。児童・生徒が運動の充実感を得ることは北海道においての大きな課題である。

(3) 単元を通した意図的・計画的な指導

生徒が課題を見失いかけた場面で、見本となる生徒の動きを用いて、再度学習課題を共有していた。機を逃さない指導によって、生徒は「根拠」のある振り返りを行うことができていた。中学校学習指導要領の1つの特徴でもある「合理的な解決」は、この「根拠」に結び付く。

(4) ICTの効果的な活用

動画撮影やドキュメントなどによるICTの活用によって、個人の振り返りを全体で共有することができていた。自らの振り返りを学習改善・指導改善に関連付けていった点が有効的だった。

◆今後の授業づくりの方向性について

(1) 単元を見通した「主体的・対話的で深い学び」の充実

教師側からの説明を発問に変えていくことで、「深い学びの創出」に変わっていく。一方的な指示や説明は学習効率を下げてしまう。主体的な活動や教師の関わりは児童・生徒のコミュニケーションや身体的活動量を活発化させ増加させる。本授業では、生徒たちが主体的に話し合いを行い、課題解決していく姿が見られ、既習した「ハンドオフ」を使ってポジションチェンジをしてオフェンスを展開する場面があった。これが単元を通して深い学びを創り出していった姿である。

(2) 指導と評価の一体化（単元構造図）

単元構造図によって、単元のゴールイメージが明確となっていた。3年間を見通して、どういった資質能力を身に付けさせるかが重要になってくる。また、学習改善に生かす評価と指導改善に生かす評価の2つの大きな視点がある。生徒の振り返りを生かして、指導改善の場面が見られた。

(3) 各領域における単元を通した指導内容の明確化

学習指導要領の例示をもとに、それぞれの領域において重点的に指導することで児童・生徒の資質能力の育成がより図られる。



授業・分科会記録

札幌市立美香保中学校

単 元：体づくり運動 実生活に生かす運動の計画「運動を日常へ！」～自分の未来を想像（創造）する～
授業者：曾我 亮太 教諭（札幌市立美香保中学校）
生 徒：3年2組 39名

<授業の様子>

○準備運動（5分間のモジュール運動）

- ・体育館に集まった生徒から順に、単元の最初の授業で作成した「高めたい体力の運動プログラム」に取り組んだ。
例えば、「力強い動き」を高めたい生徒は手を繰り返して握る動きを、「巧みな動き」を高めたい生徒はキャッチボールをするなど、自分の高めたい体力に合わせて実施した。



○課題を見付ける活動

- ・生徒たちが作成した運動プログラムを夏休み中に行った先生方のコメントをスクリーンに提示し、「運動をすることで自信につながった。」「コミュニケーションが増えた。」「晴れた気持ちになった。」「みんなのチェックがあれば継続できそう。」などの先生方の言葉から、運動の効果や継続することの難しさ、継続するための方法などを実感した。
- ・そのうえで、現在の自分自身の運動習慣について振り返り、「体育でしか運動をしていない。」「受験勉強のために時間がない。」「一人だと続けるのが難しい。」など、自分自身の日常生活に運動を取り入れるための課題について考えた。



○課題追究の活動

- ・グループごとに「運動プログラム」を作成した。活動の前半はグループ全体での話し合い活動のみになってしまったため、授業者が時間を区切り、実際に体を動かしながらプログラムを作成するよう促した。後半は、ペアを組んで筋力トレーニングをしたり、縄跳びを跳んだりするなど、実際に体を動かすことによって、日常生活で継続して実施できそうな頻度や強度に修正しながら運動プログラムを作成する姿が見られた。



○整理活動

- ・1週間の運動プログラムを作成後、「この運動をするとこうなる（気持ち・成果）だろう」という仮説をブックレットに記入した。授業者からは、実際に1週間運動プログラムを実施することを促した。

単元：体づくり運動 実生活に生かす運動の計画

「運動を日常へ！」～自分の未来を想像（創造）する～

授業者：曾我 亮太 教諭（札幌市立美香保中学校）

司会者：加藤 拓 教諭（札幌市立札幌中学校）

記録者：橋本 若奈 教諭（札幌市立明園中学校）

助言者：大巻 太一 様（札幌市教育委員会指導主事）



<分科会の様子>

○討議の中心話題

- ①授業づくりに先立って（授業づくりにおいて意識した点、新学習指導要領の理解）
- ②単元構造のねらいについて（単元全体の目標、授業づくりのポイント）
- ③単元と本時の授業について（単元全体・本時の授業の流れ、評価について）
- ④本実践を通しての課題について

○質問

単元全体の流れ・授業づくりのポイントに関わって

- ・ 1、2年生の体づくり運動の学習はどのようなことを行い、3年生を迎えたのか？
→1年生では入学後すぐに実施。体ほぐしの運動で簡単なダンス等を実施。2年生では体力を高める運動を行い、運動の原則や意義・体力要素については1・2年で学んでいる。また、授業のはじめの5分間のモジュール運動は2年生の時から実施している。
- ・ ブックレットはすべての単元で作っているのか。
→すべての単元で作成し、2年生のときからブックレットを使用している。
- ・ どんなスパンで授業を行ったのか？また、他の単元や保健の授業との関連はどうか。
→6月～11月にかけて、連続した形ではなく、2週間～1か月に1回程度で実施した。
保健の授業で、運動の効果を振り返りながら行った。夏休み中には、先生方に作成した運動プログラムを実施してもらい、生徒も夏休み中の運動習慣を記録した。
- ・ 授業者として、単元8時間の中で、子どもたちが今後どのようになっていきたいという思いをもっていればよいと考えていたのか。
→ブックレットの表紙にあるUNITの目標「自分の未来を創造（想像）する」を大切にし、自分の現在の生活習慣から、今後のことを考え、さらに他教科や日常にどうつながるかまで考えられればよいと考えていた。

先生方の運動プログラム作成に関わって

- ・ 先生方のアンケートは何名くらい協力していただいたのか。
- ・ 先生方のプログラム作成はどれくらい時間がかかったのか。授業以外に時間をとったのか。
→10名の先生に協力していただき、1グループ1人の先生について考えた。作成した時間は2時間体育の1回（単元の5・6時間目）で作成。先生方からの要望を受けて考えたので、その時間内で作ることができた。
- ・ プログラム作成の際の動画とは？
→子どもたちが運動プログラムの動画を撮影し、先生方に渡した。

本時の授業に関わって

- ・本時の目標である「受験生活に運動を取り入れるには自分には何が必要かを他者に伝えることができるようにする」の「何が」は何を想定しているか。また、「他者に伝える」のは授業の中のどんな場面で、ここにおける他者はだれか。
 - 「必要なこと」は人それぞれ違うと考えている。例えば、「3間」から仲間が必要だと考える子。目標があつたらできると考える子。それを、根拠を示して説明ができればよい。
 - 「他者に伝える」点については、本時の授業の中だけで見取ることができなかったのが課題。本時では、グループとの関わりや教師との問答、身体表現で伝える様子を観察し、学習カード（ブックレット）の記述は単元の8時間目見取る形になった。
- ・本時の運動時間は約15分程度であり運動量が足りないのではないか。しかし、単元の特性もある。どう考えるか。
 - 単元の特性上、座学や話合いの時間も十分設けながら実施しているため、授業内で実際に体を動かした時間は少なかったが、休み時間や日常に運動を取り入れることで、授業外での運動時間は増やすことができたのではないかと考える。だが、授業の中で体を動かすための手立ては考えるべきだった。実践があれば教えてほしい。
- ・話合いの場面で、生徒はどんな相談をし、どんなつまづきがあつたのか。また、それに対して授業者はどのような助言をしたか。
 - グループで話合いはしているが、一人で黙々と考える生徒、仲間が大事だと考える生徒等様々であった。全員で一緒にやっているグループには、「今日以外も一緒にやるの？」と投げかけると、ペアで・通話をしながら・動画を観ながら…と具体的な話合いになった。

○討議で見えた課題

①単元構造について

- ・最後の授業において、今後の自分の生活のイメージを作ることが難しく、運動習慣のイメージがあいまいになってしまった。先生方の運動プログラム作成を生かしきることができなかった。
- ・運動時間の確保…座学と実技のバランスや話合いと活動のバランスをとることが必要。

②本時の授業について

- ・学習カード（ブックレット）の評価ができず、発言内容や行動観察のみの評価となってしまった。
- ・chromebook を活用する際の安全面での工夫が必要。

③ブックレットの活用について

- ・評価の文言や発問の工夫、他教科や日常へとつなげるための工夫が必要。

<助言者講評>

- ・生徒の学びの姿がイメージされたブックレットで、計画的に授業を進めているのが素晴らしい。
- ・中3という運動を継続的に続けていくことが難しい時期に計画したことも挑戦的でよかった。カリキュラムマネジメントの視点で、実生活での運動の実践を達成できたのではないかと思う。
- ・意欲を持続させるために、生徒が課題を自己決定していたかどうかが大切。今回の授業では、部活動を行っていたときの運動量のデータと現在のデータを消費カロリーで比較することや、第1回の授業の際にストレスを10段階で記録し、10月と比較してストレスの解消法を考えるなどの切り口から、生徒の「やってみたい」という気持ちを引き出すなどの工夫ができたのではないか。

大会を終えて

「大会を終えて」

第 57 回北海道学校体育研究大会 札幌大会

大会実行委員長 四戸 基樹

ほぼ2年間にわたって準備を進めてきた第57回北海道学校体育研究大会札幌大会の全ての日程を終えることができました。コロナ禍がいつ終わるのか全く見通しがもてない中で、何度も計画を修正しながら「できることを全力でやろう」と北海道学校体育研究連盟、札幌市学校体育研究連盟の事務局メンバーと話し合い、知恵を出し合いながら開催した大会でした。

今大会は、これまでの会同を前提にした大会運営から、会同せずに行う大会運営への転換を図りながらの開催となりました。折しも、全学校においてタブレット端末の配付と、オンライン環境の急速な整備がなされ、GoogleMeet や Zoom での会議が可能となったとも言えます。しかし、それ以上に大会開催の原動力となったのは、「研究の歩みを止めない」という札幌市学校体育研究連盟会員の熱い思いでした。会同できない中でも研究部の綿密な計画の下、1-4ブロック、5・6ブロックでは各1本の授業を、中学校ブロックでは2本の授業を創り上げました。10月には各授業会場において動画撮影を行い、1月のオンラインでの研究討議を想定した意見を熱心に交換しながら準備を進めていく先生方の姿を見るたびに、札幌市学校体育研究連盟は、これからもますます発展していくと感じた次第です。また、今回はWebによるコンパクトな運営になったため、大会当日の運営に携われず、残念な思いをされた会員も多くいたのですが、2年に渡る準備等の間に多くの会員による気付きやアイデアを集積できたからこそ、当日を迎えられたのだと嬉しく思っております。

さらに、大会当日には北海道の他支部の皆様にも、多数御参加いただきました。研究討議の時間には、4つの分科会全ての会場で、全道各地の先生たちが活発に意見を述べ、討議に参加されている姿、助言者のお話から真剣に学ばれている姿を見ることができました。北海道の学校保健・体育科教育研究にとって、未来はとても明るいということも改めて実感した次第です。

結びとなりますが、このたびの札幌大会を多くの成果をあげ、無事に終えることができましたのも、本大会を支えてくださった授業会場校、御指導・御支援を賜りました北海道教育委員会・札幌市教育委員会・北海道教育大学をはじめ関係諸団体等の皆様、コロナ禍でも実践の歩みを止めなかった本連盟の会員、全ての皆様のおかげです。心より感謝申し上げますとともに、皆様のますますの御健勝と御発展を祈念し、御挨拶いたします。

第57回 北海道学校体育研究大会

札幌大会

発行：第57回北海道学校体育研究大会札幌大会

実行委員長 四戸 基樹

印刷：株式会社 大弘社印刷

〒064-0821 札幌市中央区北1条西28丁目

TEL011-614-4121

